
冷凍蜜柑

紺辺 奈梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷凍蜜柑

【Nコード】

N9697A

【作者名】

紺辺 奈梨

【あらすじ】

退屈な日々を過ごしていた僕は、通勤途中の電車の中で読んでいた本に夢中になって乗り過ぎてしまう。何の気はなしに降りた駅で、時間を潰すために乗ったバスの着いた先は小学4年生の時に通っていた江田分校だった。初恋を描いてみました。

一粒目

ふうつと息が洩れる。

朝六時に起きてから何回目の便意だろうか。固形状のモノはもう出尽くし、やや黄身混じった液体が唯一自律神経の意思によってのみ放出される。スケージュールも僕自身もそんなものを望んじやいないのに。

いつの頃だろうか。小便の回数を上回りはじめたのは。

止めよう。思い出すのは。ただでさえ無駄に消費される時間がまた圧迫するだけだ。と中学生時分まで思い出し始めた記憶を振り払う。同時に、またふうと息を漏らした。

その日の主要な記事を読み終わった新聞をたたみ、ウォッシュレットのスイッチを入れ水を流す。

一日の大半をモニターを見て過ごす僕にとって、インクの匂いのある新聞という存在はインターネットの迅速性、テレビのエンターテイメント性から見ると激しく劣るが、その新聞会社によって色分けされたポリシーによる情報の選択、肉付け、有用性という点において新聞というメディアは存在意義を成していた。

トイレの次は鏡の前と相場は決まっている。手を洗う所に鏡があるのだから合理的な展開だ。

鏡の向かい側に年々後退していく髪の毛の生え際を拝む。
自分の額の広さが最近気になってしょうがない。

ということは僕の見る対象の生え際も気になるということだ。

今日もすでに新聞の記事で三人程、偽毛をみつけた。

うちの職場の上司の愛用のカツラと思い比べながら、新聞の広告の写真にほとんど勝ったことのない精巧とはい難いカツラを被る上司の真意を計りかねる。

隠したいのか。話の種にされたいのか。単に予算がないのか。中年の独り暮らしなら金がないわけでもなかるうにと訝る。

他人のことを気遣っている暇があれば、今日、寿命の尽きる毛根の数を少なくしてくれと神様に祈ったほうがいいだろうにと。自嘲気味に髪をワックスで整えながら、苦笑いする自分が鏡に映る。

ひねくれてきたな。

年齢とともに見えてくる景色は広がるが、知らなければ傷つくこともない光景ばかりが見えてくるのを大人と称するらしい。

ワックスで整えながら、それなりにまとまり始めた髪型を見ながらも気分が良くなることは無い。これから始まるつまらない一日が憂鬱のいくつかの要素の一つではあるけれども、そんなことより、普段使わないワックスが毛先をベタベタさせていること。そんなひとから見れば些細なことが、気分を燻らせる。

いつだってそうだ。ヒトから見れば些細なことが重大な何かを決めるのを妨げたりするんだ。

あるときだつてそうだった。

カツラの上司は、これからはズラ之宮殿下とでもしておこう。僕のレポートの方が、同僚のレポートより本質を捉えていたのに、昨晚、ズラ之宮の飲みを断つたのが気分障ったらしく、ズラ之宮は出来の悪い方のレポートを採用しやがった。そこまでならいいが、取引先は案の定、それを指摘してきて、それを取り繕うための説明を今日、僕がするはめになった。

くそっ、なんでズラ乃宮の尻拭いをしなきゃいけないんだ。いい迷惑だ。感情で行動するやつを呪いながらも、いつものことだとたしなめる僕がもう一人いる。一々気にしていたら、僕は今頃脑梗塞かなんかで死んでるところだろう。ヤツのカツラを外した死に顔を見るまでは死なないと、それだけは心に誓っているのに。

そう、他人から見れば些細なことがいつも簡単なことを難しくするんだ。

そんなことを思いながら、冷蔵庫の中から取り出したゼリー状のカロリーメイトを飲む。朝食はこれぐらいがちょうどいい。

カロリーメイトをくわえながら、山積みされたクリーニング屋のビニールに入ったYシャツを取り出し、レパトリの少ない中からネクタイを合わせる。

同じく山積みされたまだ開けてないデパートの袋に入った私服は週に一、二度しかこない出番を心待ちにしていると云うよりは半ば諦めがちに僕の着替えを見ている。独り者のストレスを発散するためだけに買われた私服は、金は無効的に使えと悪態をつくかのように散らかった部屋の隅で固まっていた

そうこうしているうちに時間は淡々と過ぎてゆき、テレビが遅刻ギリギリの電車に乗るための時間が来たと告げる。

二粒目

空虚なまま年老いてはゆきたくない。何かをしなくちゃ。その圧迫感が僕を支配している。

わかつてはいる。けれども、踏み出せないでいる。もどかしさだけがリアルに僕を揺さぶる。けれども、答えがあるわけでもなくて、探すことも努力のうちなのだと気づいてはいる。

自宅から駅まで歩く15分は、変わらない昨日と今日と明日に突きつけられたその事実を思い出すのに十分すぎる時間だった。

無意識のうちに自宅の鍵を閉め、無意識のうちに信号が青に変わった横断歩道を歩く。

終わることのないメビウスの迷路を抜けることに思考のほとんどを傾けながら。

どちらが無意味なのか。考えることか。糧を得るための仕事なのか。

大人という部類に入ってから何百回と繰り返されてきた不毛な思考。

……もう、止めよう。

とお決まりの結論に達した頃には、お決まりの電車の乗車口で名前も仕事も知らないけどお決まりの面子と一緒に並び、電車を待つ。隣に並んでいる女の香水の匂いからして木曜日かと、日付の表示さ

れない腕時計の針を見る。なかなか癖というものは直せない。「おまえは何かに追われているように、時計ばかり見るよな」と言った遊び友達の言葉を思い出した。

本当のところ、クロノグラフのいくつもの針が連動して一つの時間を紡ぎあげる様を見ると落ち着くし、機械式時計のずれていく危うさが気を紛らわすのにちょうどいいだけなのだが、説明するのが面倒くさくて、適当に相づちを打ってその場をしのいでいた。

プラットホームにアナウンスが流れ、潮風で所々錆びた電車が時刻表どおりに駅へと入ってきた。もう既に満杯になった車両のドアが開く。込み合った車内は車窓を曇らせていた。見るだけでもたれそうな圧縮陳列された車内でこれから過ごす30分を考えれば、朝食をカロリーメイトゼリーにしたことは完璧な選択だ。

押し競饅頭の原理で車内へと入る。慣れているとはいえ、決して好きにはなれない。反対側のプラットホームにあるがらがらの下り電車の車内を羨ましく思う。

下り列車を見ながら、叶うことの無いことは忘れてしまおうと自分に言い聞かせる。その前にそんなことを考えなければよかったんだ。忘れてしまいたいという欲求は忘れてしまうに限るから。本当に好きだった彼女に亭主がいることは知っていた。くちづけで共有する二酸化炭素が多めの空気は麻酔ガスみたいにいるんな難しいことを忘れさせてくれた。湿気のあるパフュームの香りは隣の部屋に眠る幼子の寝息も忘れさせてくれた。

そのあとに残る何十倍もの後悔さえなければ今も二人は一緒にいられたのかもしれない。

そんなことも忘れるに限るんだ。

あのがらがらの電車が行く三つ先の駅にそのひとがいることも忘れるに限る。

だって、あの幼子が無邪気に笑う度に幸せみたいな塊は触れたら何もなかったように崩れさっていくんだ。何千年も置き去りにされていた死海写本みたいに。結局、神様のラブレターは最愛の人が生きている間には届かなかった。

僕の気持ちももう届けるつもりはない。

電車のドアが閉まる音がして、ゆつくりと車両同士が小突き合いながら進み出した。僕は暇つぶしにまだ使い込んでいない皮の匂いのする茶色のカバーをした一年かけても読み終わらない薄っぺらい小説を取り出す。面白い本は時間を忘れてしまうから、つまらない本なら生活に支障が起きることは無い。物語より次の駅と時間が気になるのだから。

だけど、世の中は計算したつもりが全然違う方向に行ってしまうこともある。

つまらない本が次のページをめくった瞬間、思い出したかのように息を吹き返して物語が瑞々しくなってきたしまった。

ちゃんとつまらないままでいろよと呟きながら次の展開を気にしている自分がいた。

今までのつまらなさがまるで伏線かのように言葉一つずつが息を吹き返す。読み進めるうちにカツラ之宮のことや仕事のことも記憶

の中から消え、夢中になってページをめくった。

やがて本を読み終えたとき、電車の乗客はまばらでアナウンスは次の駅が終点であることを告げていた。

どうやら、一時間くらい乗り過ごしてしまったみたいだ。本を呪いながらも、此処のところ無かった満足感を感じていた。

だけど、今から戻って会社まで行けばかなりの遅刻になりそうだ。

ズラ乃宮が真っ赤になって怒鳴り散らし、奴の髪の毛の生え際がずれるのを必死になって笑いをこらえながら反省する演技をしなければいけないことを考えると余計に重たい気分になった。

どうせなら今日は仕事をさぼってしまおう。明日まとめて怒られればいいや。怒られるうえにあいつのしりぬぐいをしなければいけないことも僕の決断を後押しした。

とりあえずは終点で電車を降りて、駅前の喫茶店にでも入ろうと思ひ、駅の改札に向かった。

三粒目

へえ、自動改札機がないんだ、と呟く。

初めて降りる終点の駅から見える景色にビルは一つもなかった。陽の匂いとそれを浴びて光合成をする草木の香りが僕を包み、

えらいとこに降りちゃったな、と思わず言葉を漏らした。

駅前にはバス停が一つ、時刻表を見ると二時間に一本しかバスがないらしい。

駅前だというのに、喫茶店の一つもないようだ。サボると決めたので、しょうがなく時間が潰せる所にも行こうとあと30分程で来るバスを日焼けたベンチに腰掛けて待つ。

この駅はこの街の中心から離れているからね。なんでこんなところに駅を作るかねえ、とこんな時間にスーツ姿の男がバスを待つのがめずらしいのか、隣に腰掛けたおばあさんが親切に教えてくれた。

おばあさんは時間なんて、この街ではだいたい合っていればいいんだよと、バスが時刻表の時間になってもこないのに少しいらだっている僕の様子に気がついて優しくつけたしてくれた。

僕は営業慣れした相づちを打つ。

でも、それは愛想笑いではないことに気づいて、僕は僕自身に少し驚いていた。

ゆとり教育とかいう名前だけの欺瞞だらけのゆとりより確かな時間がこの街に流れているな、とまだ何も知らないのに納得していた僕がいた。

単純だな。こういう男はすぐ墮ちる。とサタンが見てたらそう言うだろう。

サタンというのは同僚のあだ名だ。

本物の悪魔なんて見たことないし、見たくもない。人間のサタンだけで十分だ。たちの悪さでは両雄引けを取らないが。

ようやくバスが着いた。乗客は今のところ、このおばあさんと僕だけのようだ。

「おはようさん」バスの運転手がおばあさんに声をかける。おばあさんは小さく手を振りながら一番前の席に座って、運転手に世間話をはじめた。

どうやらなじみの客らしい。

僕はバスの乗車口の後ろの席に付いた。ちょうど下にタイヤがある一段盛り上がった席だ。酔いやすいと敬遠されがちな席だが、空いているときはこの席に座るのが僕の癖だ。あまり譲らなくてすみためかいつのまにか僕の中で決まりごとになっていた。

茶色に染まった刈り終わり次の春へと力を溜めている段々畑と、所々に所在無げに寂しく立っているかかしのんびりとぼつんぽつんと建つ農家がバスの車窓を流れてゆく。車窓を開けて空気も楽し

みたいところだが、まだ春が遠い今の時分の寒さと引き換えにする
勇氣は僕は持ち合わせていない。延々と続く単調ながらも息吹を感じ
る風景を見ながら、僕はうとうと安らかな眠りに導かれた。

お客さん、終点だよと運転手が僕を揺り起こす。僕はあくび混じ
りにありますがとうございまずと瞼を擦る。運賃を支払って降りたバス
停には「江田分校前」と書いてあった。時刻表を見ると、午後にな
らないとバスが来ないらしい。またそのままUターンして街の中心
部まで乗せてってもらおうと思い、運転手に声を掛けようとしたが、
バスはディーゼルの力のこもった排気音とともに行ってしまった。

四粒目

まあ、いいや。

とりあえず、会社の同僚に仮病を使って休むために連絡を取ろうとしたが携帯は圏外になっていた。圏外だと、すぐに電池が無くなってしまうので、バスが来るまでは電源を落としておくことにした。

こんな所でどうやって二、三時間も時間を潰すんだよと呆れながら、バス停の後ろにある分校を見た。どうやら廃校のようだ。本来なら授業中のはずなのに生徒の姿が見当たらないからだ。校庭は地域に開放されているらしく、門は開きつ放しだった。分校にしては大きいグラウンドの向こうに見える二階建てのこじんまりとした木造校舎は愛嬌のある懐かしい佇まいをしていた。僕はその校舎に導かれるように、分校の門をくぐった。グラウンドの端には遊具が置いてあり、運丁や ブランコや 鉄棒や 吊り輪やジャングルジムが緩い風に揺られながら、キーキーと錆付いた音を奏でていた。

僕はその中のブランコに腰掛けて校舎の向こうに見える山々と時折、とおりに過ぎる小鳥たちのさえずりを何も考えずぼつつと眺めた。

「かず君！また授業サボって何してるの！」と突然後ろから呼び掛けられ、びくつとして振り返ると小学校三四年生ぐらいの女の子が立っていた。なんでこの子は僕の名前なんて知ってるだろうという思いは、あどけない笑顔でほっぺを膨らまして怒るしぐさにあの山の向こうへ運ばれてしまっていた。

瑞々しい綺麗な髪の毛を一つにゴムで結んでいる奥二重の大きな目の勝ち気な女の子の名札には「四年川上ゆうか」と書いてあった。

この学年の子が分かる字だけ漢字にしてある名札は同時にこの分校がクラスが無いくらいの規模だということを教えてくれた。

さっきまで人の気配さえなかったのに、校舎からは授業をするはつきりとした女の先生の声と音読する生徒たちの声が聞こえてきた。

全く状況が飲み込めずばかりとしていた僕は彼女に引っ張られるがままに木造二階建ての校舎に導かれた。

ちよつと、ちよつと部外者が入ったらまずいでしょと僕は女の子に言ったが、

「また、かず君のホラがはじまった」と女の子はまるで相手にしてくれず、「もうマジメに聞いてよ」と呆れながら

僕の手を引っ張り続ける。

イヤに力が強い女の子だ。と思っていたら、いつのまにか僕の目線と女の子の目線の高さが一緒であることに気付いた。

校舎の板張りの廊下を歩くと木が鳴く音がする。懐かしい音だ。

「遊具にはばいきんがいつぱいついてるんだから」と僕はせかされるがまま、納得がいかないままに洗い場でネットに包まれた石鹸を泡立て手を洗いながら、何気なく洗い場の鏡を見ると、そこには男の子が、嫌々ながら手を洗っている姿が映った。鏡越しの男の子の名札は反対になって読みづらいが、「四年いなばかずのり」と書いてあった。

思わず目を疑った。それは僕の名前だったからだ。

五粒目

そう。そして、鏡に映る少年はまぎれもなく小学校四年生の僕自身だった。

ということは……頭がフリーズしている。

この「川上ゆうか」という女の子は四年の頃一番仲良かった「ゆうちゃん」なんだろうか。すぐに「そんなわけない」と理性が反応して余計に混乱する。

頭の整理ができずに、鏡の前の少年もぼかんと泡のついた手のまま立ち尽くしていた。

「もう、手あらいくらい自分でしてよ。かず君」と女の子は、僕の手の石鹸を水で洗い落としてくれた。

そういえば、ゆうちゃんが世話を焼くの好きだったっけ。押しかけ女房とからかわれたりしたな。次から次へと思い出が溢れてきた。

紛れもなく僕は何でか知らないけど10歳の頃の世界にいる。そして此処が、親の転勤で四年生の頃、転校してきた「江田分校」だったんだ。

「今日ぐらいしっかりしてよ。かず君とは今日でお別れなんだから」と少しいじけたような声で僕に言う。

僕は「ごめん、ゆうちゃん」とばつが悪そうに返した。

「ほら、もう、おかお先生に怒られるよ」とゆうちゃんがせきたてる。

僕は洗い終わった手をハンカチが無いことに気付いてズボンで拭こうとした。もう、いつも忘れるんだからとゆうちゃんは僕にハンカチを貸してくれた。ありがとうとハンカチで手を拭いて返そうとしようと思ったが、

「かず君！」と、おかお先生が教室の引き戸を開けて顔を出して怒っていたので慌てて、そのハンカチをズボンのポケットにしまつて、教室へと入って自分の席に着いた。

なんで席なんて覚えてるんだろうと思っていると、「ゆうかつてなんでそんなにかずに世話焼くんだよ」とからかっている同級生にゆうちゃんは消しゴムを投げて、あっかんべえとしてみせる。教室のみんなはまたそれをからかう。

「はいー！！授業中ですよ！！」と、おかお先生が黒板を叩いて、みんなの背筋がぴしっとなる。僕も姿勢を正しながら、怒り始めると手がつけられなかったと、おかお先生のことを思い出してくすりと笑ってしまった。先生はそれを聞き漏らさず、「かず君！！次の段落を音読して」と畳み掛けた。「はいっ」と飛び上がって起立し、僕は机の上に置いてあった教科書の「だいぞうじいさんと雁」を音読した。

どうやら、ゆうちゃんがこっそりページを開いていてくれたみたいだ。段落を読み終わると、「かず君、もしかして音読の練習した？」と先生が聞いてきたので、僕は「してないです」と正直に答えた。おかお先生は首をかしげながら、「おかしいわねえ。いつも漢字でつまづくのにね。今日は良く出来てるわ」と褒めてくれた。「当たり前だよ。大の大人が漢字読めなくてつまづいてたら目も当てられない」と思いながら、おかお先生は怖いけど、何か頑張ると必

ずみつけて、人よりどんなに下手でも褒めてくれる先生だったということを思い出した。大学で赤点をよこしやがった教授と偉い違いだ。先生と名がつく者、全てが偉くは無いんだといつごろから知ってたっけなどと他愛もないことを考えていると授業の終わるベルが鳴った。

六粒目

どうやら次は給食の時間らしい。

「はい！！班ごとに席を並べて！！」と、おかお先生が教室の中を響き渡る声を出した。

四年生、１２人が４人ごとに班になって机を向き合わせた。僕の斜め前に座るゆうちゃんとは斜向かいになるということだ。

僕の向かいがめぐちゃん。こちらもゆうちゃんに負けず劣らず勝負な子。一つ班を挟んで、廊下側の班に座るお山の大將のテルもケン力ではかなり手こずっていたな。

そして、僕の隣りに座るのがトシ。親はここらへんの大地主らしくて、その親の遺伝子を受け継いで学校内でも評判の秀才だ。だけど、そんなところを微塵も感じさせないトシは僕にとって非常に頼りになる存在だった。

宿題するのに何度お世話になったことか。感謝感謝。

廊下側から順番に書くところなる。

ゆき かおり

テル ツヨシ

あい まき

ジュン ヒロ

ゆうか めぐみ

トシ 僕^{カス}

10年以上経ってるのに、よく憶えてるもんだなと自分で感心してしまう。

机にナプキンを広げて、箸を行儀良く並べていると、割ぼう着を着た給食当番のテル、ツヨシ、ゆき、かおりがカレーの匂いを引き連れて、給食を運んできた。今日の献立はカレーとゴハンとひじきの煮物と冷凍蜜柑と書いてあったな。

ひじきと人数分しかない冷凍蜜柑は別としておかわりの争奪戦になりそうだ。現にもうすでにテルのよそったカレーが少ないと優良肥満児のジュンが文句を言っているし。テルは「そんなことねーよ」と否定しているけれど、ちゃっかりテルの器にはカレーが山盛りになっていた。

子供ってわかりやすいと思いながら、僕も今は小学四年生だということを思い出した。

実は僕の頭の中もようやく落ち着いてきて、元の自分に戻るにはどうすればいいかとあれこれ考えていたけど、こんな時間も悪くないと目の前にある給食を見てぐーぐー言っているお腹をさすった。

隣のトシも引き算解いているときはあんなに冷静なのに、「いただきます」と早く言いたいのか、カレーを今にもヨダレが垂れんばかりに食い入るように見て貧乏揺すりしていた。

頃合いを見計らったように先生が日直のまきちゃんとヒロに「では、いただきますよ」と声を掛ける。

「はい。いただきます」とまきちゃんとヒロの爛漫な声に「いただきますー！」とクラス全員の声が後に続く。やっぱり大将のテルの声が一番デカい。

僕もお腹が減っていたので給食にかぶりついた。カレーがちよつと甘かったので、ひじきにすぐ手をつける。この歳になってようやくひじきも食べれるようになったけれど、この頃は残さず食べなきゃいけないのが苦痛だったなと、いつも居残って食べさせられていたヒロの奴をちらつと見ると、案の定、ひじきの前で固まっていた。がんばれヒロ！と心の中でつぶやいていたらヒロの奴があいちゃんそこそこ喋っていた。

どうも、ひじきと冷凍蜜柑の交換を交渉しているらしい。ヒロがあいちゃんを拝むように手を合わせ冷凍蜜柑は愛ちゃんのもとに渡った。

交渉成立だ。

ヒロは蜜柑をまだうらめしそうに見ている。あいつは冷凍蜜柑だけはちゃんと食べていたっけ。

あいつの数少ない好物を差し出したということは背に腹は変えられないってことか。よっぽどひじきが嫌いなんだな。

その様子をひじきをほおびりながら見ていると誰かの視線に気付いた。ゆうちゃんがひじきを食べている僕を珍しそうに見ていた。

どうしたん？と食べながら聞くと、

「かず君、いつから食べれるようになったん？」

「つい最近」とこたえる。

と言つても15年後から計算して、つい最近だけど。

「えらいなあ」とゆうちゃんは自分の前にある手がつけれないていないひじきを見ている。そうだ、ゆうちゃんも苦手だったけか。

「ひじき食べようか？」

「うん。じゃあ、みかんとこうかんしょっ」と救われたように言うから、

「いいよ 食べてやるよ」と蜜柑の申し出を断り、ゆうちゃんのひじきをペロリと食べて見せた。

「かず君らしくないなあ。やさしいとこ。」とキョトンとするから、
「失礼だなあ」と返す。

そんな会話をしていると隣りのトシと向かいのめぐちゃんまでこつちを訴えるように見るもんだから、仕方なしに全部で四人分のひじきを平らげた。いくら成長期とはいえ、小学四年生のお腹には過負荷だったようで、給食を食べ終わったときには僕のお腹はいっぱいいでベルトがきつくなっていた。

冷凍蜜柑をもらわないでよかったと切実に思った。

七粒目

給食が終わって昼休みの始まるチャイムが鳴ると

「かずーっ、サッカーしようぜ」と大将のテルが僕を呼ぶ。

鋼鉄の胃袋を持つこの漢にはさすがのひじきも通じなかったらしい。カレーの入った給食鍋が空っぽになっているのがなによりの証拠だ。

「今、行くよ」と手を振って見せる。

この学校には昼休みに高学年はサッカーをするという不文律みたいなものがある。テルは5、6年生相手でも当り負けしない強さがあった。中田英寿のドリブル。と言ったら大げさだけど。伊達に一年中、半袖短パンではないのだ。

「お待たせ」とグラウンドの隅でリフティングしているテルに声をかけると、リフティングしていたボールをツヨシに預けて、あつちいこうぜと遊具置き場を指差す。

「サッカーやんないの？」と訊くと、何も言わず、背中を僕に向けてたまま「いいから来いよ」と手招く。僕は、なんだよって思いながら、駆け足でテルに付いていく。

「座れよ」とぶつきら棒にブランコを指すから、僕は少し乱暴にブランコに腰掛けた。

しばしの沈黙を誤魔化すように二人はブランコを漕ぐ。ちょっと離れた鉄棒で二年生が逆上がりの練習している以外は遊具置き場に

はひとはいなかった。

「おまえさ、今日でこの学校、最後だろ？」テルが切り出す。

「ああ」と地面を少し蹴る

「気づいてんだろ？」

「何を？」

「俺に言わせんなよ」

「言ってくんないとわかんねーよ」

「ああ、めんどくせえ」

「おまえが誘ったんじゃない」肉弾戦では万に一つも勝ち目は無いけど、口げんかではちよつとやそこらじゃ負けない自負のある僕の言葉はきつくなつてゆく。

テルは諦めたように「ゆうかさあ、おまえのこと好きなんだよ。気づいてんだろ？」僕以外に聞こえないように低く話す。

「そんなことないだろ」

「いいーや。ゆうかはおまえのこと好きなんだ」

「そんなのなんでわかるんだよ」

「わかるんだよ」

「だから、なんでだよ」

「わかるったら、わかるんだよ」

「だーから、なんでかって聞いてんの」

テルはちえつと舌打ちして「俺がゆうかに告ったら。フラれたんだよ。玉碎でーす」と外人みたいなリアクションで恥ずかしさを隠すようにおどけてみせる。

「フラれたのと、俺のこと好きなのはまた別だろ」

テルはみなまで言わせるなっで顔をして「なんで俺じゃダメなのかって聞いたんだよ」

……「そしたらカズのこと好きだっでさ」

「まじ?」

「大まじ」

「命賭ける?」

「ああ、命かけるよ」

「出べそのお前のかーちゃんに誓って?」

「ああ、かーちゃんにだってちかえる。出べそはよけいだ」と僕を小突く。

……二人は黙り込んだ。一人は敗北のため。一人はその事実を初めて知ったために。

聞こえるのはサッカーの掛け声とブランコの錆付いた音だけだった。

八粒目

僕は15年前の記憶を頭をフル回転して呼び起こそうとする。

ゆうちゃんのこと俺はどう思っていたんだろう

確かに、

ゆうちゃんと一緒にいると楽しくて、

ゆうちゃんと一緒にいればどんな遊びでもよくて、

スーファミのF・ZEROではいつも勝てたし、

忘れ物が多い僕に鉛筆を貸してくれたし、

夏休みの宿題も最後の日に見せてくれたし、

飼育当番も代わってくれたし、

僕の枯れかけの朝顔を救ってくれたし、

ザリガニを釣って見せるとすごく喜んでくれたし、

間違ってお隣の窓ガラスをボールで割ったとき一緒に謝ってくれたし、

ウソをついた自分が悔しくて泣いてたとき傍に居て励ましてくれた。

だけど、だけど、

僕はゆうちゃんに何一つしてやれてないんだよ。

そう、何一つ。

なんで僕なんか好きになっただよ。

テルのほうがよく頼りになるし、

トシのほうが頭もいいし、

ツヨシだってジュンだってヒロだって僕よりいいとこみんな持っている。

なんでさ、僕のこと好きになつてくれたんだろ

僕は泣いた。

泣いたんだ。いろんな感情がごちゃ混ぜになつて、わからなくなつて泣いた。恋とか知らない僕がいた。「僕は25だぞしつかりしろよ」と自分を諭そうとするけど、涙は止まらなかった。

うれしいって気持ちはたしかにあつて。好きなんだとも思う。でも、どんな好きなのかもわからないし、どうすればいいかわかんないし、だいいち

今日で最後だよ！！もう時間ないじゃないか！！

……。

そこには泣きべそただのハナタレ小僧がいた。

テルは僕を見ないで泣き終わるのを待つていてくれた。「ゆうかに絶対カズには言うなって口止めされてんだ」と僕の肩を叩いて、「あいつの言う事きかないと殺されちゃうだろ」と内緒話をするように付け足して笑ってみせた。

こいつ、僕を励ましてくれてんだな。

僕は何も言われたわけでもなかったけど袖で鼻水を拭きながら「うん」と応えた。

泣き終わった頃には、昼休みはほとんど終わっていた。

僕の記憶が確かならば、小学四年のこの日を最後に分校の友達とは接触していない。

そう、この日は特別な日ではなく、何も起きずに

普通に学校に行き、普通に給食を食べ、普通にサッカーをし、普通にお別れ会をし、この分校と別離した。

今、テルから、こんなことを打ち明けられたことは僕の記憶に無かった。

記憶だけではなく事実が無かったのだ。もし忘れていたとしたら、よっぽど神経が図太い男だ。僕はさすがにそこまでは図々しくは無いと思う。

なぜだかわからないけれど、僕はこれから先の人生に干渉できるチャンスを与えられたのかもしれない。

そんなことを神様にしてもらうような善行をした憶えは無いが。

カツラを獲ろうとする欲求を忍耐で押さえ込んでいた日々が、心当たりだと言えなくもないけど。

誰もが一度は思うこと、

もしあるとき、あれをしていたらよかったのに。

そう、後悔は先に立たないのだ。

味気なく終わってしまったこの分校時代の人間関係を変えること

が、何かを変えようとしているのかもしれない。

どうすればいいだろう？

なぜこんな機会を僕は与えられたのだろうか？

もしかしたら、ただの夢かもしれない。

起きたら、なにも変わらない日々が横たわっているのかもしれない。

そもそもテルはなぜこんなことを打ち明ける気になったのか聞いてみたらわかるかもしれない。

あるいはわからないのかもしれない。

そういえば、僕は傷つくのが怖くてヒトの気持ちを深く知ろうとしなかった。

そんないつもの僕ならテルに真実を聞くことを躊躇していただろう。

なぜ 躊躇する必要がある？

わからない。

誰かが傷つくの？

わからない。

それならやってみればいいじゃないか？

わからない。

いつものおまえなら何も聞かずに終わってるだろう。

でも、おまえは今を生きているのか？

今、大切なものもなく満員電車に乗る日々がおまえの望んだものなのか？

……。

どうなんだ？

……わかったよ 聞いてみるよ。

僕は僕に答えを出した。

とにかくやってみようと決めた。

だって、この人生がこれ以上つまらなくはないだろうから。

神様っているのかもな。

「……あのさ……」

「うん？」

「聞きたいんだけどさ」

「ああ」

「テルはどうして打ち明ける気になったの？」

「決まってるじゃないか、おれたち友達だろ」

「さあね」と僕はおどけて見せた

「こいつ、ころすぞ」テルが僕を小突く

お互い、顔を見合わせて吹き出した。

校舎から昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

……そう単純なことだった。

友達なんだよね。

九粒目

五時間目は理科の授業。

夜空が方角によってどういつふうに見えるかという内容だった。

そういえばこの町の夜空よりきれいな星空を見ることはなかった。

いつかの五月、テルとゆうかとまきと僕の四人で町外れの小川に蛍を見に行った。舞う蛍を捕まえようと虫取り網を振り回した先に見えた星空も僕らは捕まえられるんじゃないかと思った。

スピカ、アルフェツカ、プリケルマ、アルクトウルス。その頃は名前も知らなかった星たちに僕らはお互いの名前をつけた。

この間、玩具屋で買った1万個の星が輝く家庭用プラネタリウムもかなわない。結局は僕の部屋は四角い箱でしかないのだから。それに見たことのない銀河だと思ってよく見たら、部屋の染みだった。黒光りする宇宙船が横切るなんてこともある。

終了のチャイムが鳴った。スライドショーは北天の夜空を映して終わった。

お別れ会？

とても楽しかったよ。みんなの目差しは暖かくて。

中には泣いてくれた子もいた。

ありがとう。でも、僕はそんな価値のある人間じゃない。

涙と一緒に僕の僅かな記憶も流してくれていいよ。

そんなこと言っなよ。僕の心が丸見えならテルはそう言っで本気で怒るだろう。

そうだな。

そういうふうに考えるのはやめようと決めただけじゃないか。

だから、

僕は出来るだけ笑うことにした。

もし、みんながこの僕を憶えていてくれるとしたら、笑顔がいいから。

そうやって僕はみんなから貰った寄せ書きを高々と掲げた。

みんなこと、忘れないさ。

放課後。僕が机の中の荷物を整理していると廊下の方からテルが呼ぶ声がする。

「何？」

「何？ じゃないだろ。ひとがわざわざ絶好のしちゅえーしょんを用意してやったのに」

「シチュエーションなんて慣れない横文字使っでどうしたん？」

「うるさいな。今日じゃなかったらぶん殴ってるぞ」いいからよく聞けよ、と耳打ちする。

テルが遊具置き場で遊ぼうとゆうちゃんを誘ったらしい。そこで

二人きりになってゆうちゃんに告白しろということだ。

ありがとう、という気持ちでいっぱいだったけれど僕はその時「うん」としか言えなかった。

僕は道具箱、絵の具セット、習字セットなどをランドセルに、ランドセルに入らないものは手提げ袋に入れた。

あまりの荷物の多さに日頃、荷物を持ち帰っていないことを悔やんだ。

遊具置き場へ歩いていくと、

「テルくんは？　なんだか引っ越してみたい」とジャングルジムのてっぺんからゆうちゃんの笑い声がする。

「引っ越したし。テルは先生に呼び出されてたよ」テルと打ち合わせどおりのウソをつく。

ジャングルジムの頂上を見上げる。夕日が眩しく逆光になってゆうちゃんの表情は見えないけど、なんだか澄んだ声が寂しげに聞こえた。

十粒目

「ジャングルジムに何で登ってるの？」

「わたし、学校でこの場所が一番好きなんだ」

「どうして？」

「登ってくればわかるよ」

僕もてっ辺に登ってゆうちゃんの横に座った。

「見て」ゆうちゃんが空を見上げた。

藍色に染まった空に幾筋ものオレンジ色や赤色の雲が走っていた。僕は思わず息を呑んだ。

「空がこんなにも近いでしょ」ゆうちゃんは誇らしげに言う。

「うん」

「なんで夕方の空ってこんなに赤いのかなあ」ゆうちゃんが独り言のように呟く。

「空気って粒で出来てるって知ってる？」

「ううん。でもそれと夕焼けが赤いのはどんな関係があるの？」

「太陽からの光のうち、青い光は強いけど、その分、空気の粒に弾かれて僕らの所に着く頃にはバラバラになってしまうんだ。」

「だけど赤い光は、青い光みたいに強くないから、空気の粒に弾かれてもバラバラにならないで僕らの所まで届くんだよ。だから赤いんだ」

「ゆうちゃんが僕をじーっと見ている。僕は緊張してまともにゆうちゃんの顔を見れない。」

「ふうん。よくわからないけどカズくんはもの知りね」

「そんなことないさ」

「ねえ、

「ゆうちゃん……」

「何？」

心臓がもつと酸素を運べとせつついて、僕は大きく息を吸った。

「テルから聞いたんだけどさ」

「もしかして バレちゃった？」 ゆうちゃんの顔が夕焼けみたい
に赤くなる。

「そのもしかして」

「全く、テルくんにはあれだけ黙っといてって言ったのに」

「気にしなくていいんだよ。」

「わたしが好きなだけなんだから」

「あのさ」

「だーかーらー」

ゆうちゃん、聞いて。

「こんな気持ち初めてでどんな風に言えばわからなかったけど、今
日、テルと話しててわかったんだ」

ゆうちゃんのこと、

「好きだよ」

「一緒にいたいよ」。

そして、胸の痛みが洪水のように溢れ出した。

「なのにさ、今日でお別れだろ？こんなに一緒にいたいのに明日か
ら離れ離れなんて。なんで 僕はこの気持ちにもっと早く気づいて
もっと早く正直になれなかったんだろっ」

顔中、鼻水と涙だらけになった。どんな大女優だってこんな不細
工な泣きっ面はできやしない。

「わたしも一緒にいたいよ。でも離れ離れでも一緒にいることはで
きるよ」

ゆうちゃんの瞳にも夕日が滲んでいた。

「どうやって？」

かずくんが教えてくれたじゃない。

「太陽とわたしたちはこんなにはなれていても、空気をつぶがじゃ
ましても夕日のこの光はバラバラにならずに届くんでしょう？」

「そっだよ」鼻をすする僕。

「かずくんとゆうかだって出来るはずだよ。どんなに離れていても

「一緒に」

「そうだといけれど……」

「そんな弱気でどうするの！……どこにいたって同じ空の下じゃない」

「うん」 同じ空の下、 僕らは同じベクトルの光

「わかればよろしい」

「えらそうだなあ」 ありがとう。

「うるさいなあ」

涙を拭くと、夕日が山々の稜線をオレンジ色に浮かび上がらせ、
ヤングルジムを暖色の光が包んでいた。

十一粒目とエピソード

溢れる光の中、校門の前で母親の手を振る影が見えた。本当にお別れの時だ。

「手紙……書くよ」

「うん。でも、かずくんから年賀状着たことないけど大丈夫かな」
悪戯に笑う。

「やな感じだなあ」ムスツとする。

「うそうそ。待ってる。わたしも書いていい？」

「うん。でも、芋の判子はんべんね」

「ひっどーい。去年の年賀状、自信作だったのに」

僕らは一しきり笑い合ったあと、ジャングルジムから降りて母親の待つ校門まで黙って歩いた。

いつまでも二人一緒に歩いていたらかった。

もっと同じ空気を吸っていたかった。

ずっと同じ夕日を浴びていたかった。

ここからいなくなるなんて考えられなかった。

でも、時はそう思えば思う程、早く過ぎて

気がつくと、母親の待つ車の前まで来ていた。

「さよなら。じゃないよね？」

「さよなら。じゃないよ」ゆうちゃんは微笑む。

「絶対、手紙書くし、電話もするし、ゆうちゃんのこと思ってる」

「うん。わたしも」

動き出そうとする車の窓を開け、僕らは指切り約束した。

「またね!!」

「またね!!」

やがて車は徐々に進みだし、ゆうちゃんはどんどん小さくなって

いく。

遠くなればなるほど僕は手を大きく振った。ゆうちゃんにいつまでも見えるように。

ジャングルジムと同じ夕日が僕らを見ていた。

終わり。

エピローグ

「お客さん、お客さん」

僕はその声に揺り起こされた。ぼやける目を擦り、見上げると朝乗ったバスの運転手だった

「ここは？」

「随分、気持ち良さそうに寝ていたから、終点までいって戻ってきたよ」

「どのくらい寝てました？」

「そうだなあ。片道二時間だから、四時間かな。お客さん、相当疲れてるんだねえ」

僕は欠伸を噛み殺して、「お蔭様でかなりすっきりしました」

「僕、昔終点の江田分校に通ってたんですよ」

「エデン？なんだそりや、聞いたことないぞ。なんかいい夢でも見たんかい」バスの運転手は首を傾げる。

「どうやらそうみたいですな」

ああ、やっぱり夢だったのか。

僕は寝すぎて節々の痛む体を起こして、運賃を払いバスを降りた。

やっぱりしな。そんなに上手くいくわけないか。

僕は会社に休むのを連絡してなかったことを思い出し、電話しよ

うとポケットの携帯電話を探した。

ポケットを探ると布切れみたいなものが指に引っ掛かった。
取り出してみると、自分の物ではないけどどこか見覚えのあるハンカチだった。

……あつ。

僕は思い出した。

それはゆうちゃんから借りて、返しそびれたハンカチに似ていた。
僕は呆然としていると、ポケットの携帯電話が鳴る。慌てて携帯電話を取る。

メールが一件着ていた。

送り主は川上優香だった。

十一粒目とエピソード（後書き）

拙い文章ですが読んでくださってどうもありがとうございました。

出来れば感想などくださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9697a/>

冷凍蜜柑

2010年10月10日02時16分発行